

ストーンヘンジ、エイヴベリーの巨石遺跡と関連遺跡群

英国のふたりの巨匠
ターナーとコンスタブルの描いた水彩画「ストーンヘンジ」



前回の「マイスターのささやき」では、イギリスの画家ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー（1775年～1851年）について寄稿いたしました。イギリスには、ターナーと常に比較される巨匠が、もうひとりいます。風景画家のジョン・コンスタブル（1776年～1837年）です。

この英国を代表するふたりの画家が、世界遺産「ストーンヘンジ」を描いていたことは、驚きです。このことについては後述いたしますが、まずはコンスタブルとその代表作について、簡単にご紹介しましょう。

代表作は、『干し草車（1821年、ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵）』です。日本でも企画展で紹介されたことのあるこの作品は、イギリスの牧歌的な農村風景を描いた作品として、高く評価されています。コンスタブルの描く農村風景の特徴は、水辺、人、動物、緑や木々、流れる雲の5つの要素が描かれていることです。代表作「干し草車」では、それらがバランスよく構成されています。色調に派手さはなく、落ち着いた色合いになっています。また、ゆったりと流れる水辺の様子を描くことで長閑さを演出し、空を実際よりもダイナミックに描くことで躍動感を生み出し、深く濃い緑色が画面全体を引き締めています。さらには、生活感を表すために人や動物を描き、最後にアクセントとして、輝くものを1点、馬の鞍の部分に「赤色」を入れています。バランスのとれた、たいへん優れた作品です。



ジョン・コンスタブル「干し草車」
(1821年/ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵)

ただ、ひとつだけ気になることがあります。実際のイギリスの風景は、緑がもうちょっと鮮やかでみずみずしいように思うのです。イギリスと言われなかったら、どこの風景か、わからないかもしれません。どことなく、オランダやフランスを合わせたような色調にも見えます。イギリス人にとって、コンスタブルの風景画は違和感を覚える絵だったのかもしれませんが。実はそこがポイントで、コンスタブルの多くの作品は、それゆえにイギリスでは評価されずフランスで評価されたのです。この作品は、パリの官展「サロン展」で見事に入選しています。（サロン展については、2019年8月13日付けのマイスターのささやき「パリ・セーヌ河岸」の中で記述させていただきましたので、ご覧いただけましたら幸いです。）

コンスタブルは、肖像画ではなく風景画を主に描いていたために周囲から遅れを取っていた、という意見もありますが、私は色調がその理由である気がします。しかし、この色調だからこそ、全体的なバランスが取れているのです。当時のイギリス人には、コンスタブルの良さがまだ理解できなかったのでしょうか。

一途に近郊の農村風景を描き続けたコンスタブルは、母国イギリスでは評価されず、先にフランスで評価されました。それに対して、抽象的な画風へと変化し続けたターナーは、先にイギリスで評価され、後に海外で評価されました。このことは、ふたりの性格や作風の違いも影響していると考えられます。

20代でロイヤル・アカデミー会員となったエリート画家のターナーと、50代でようやく会員となった苦勞人、コンスタブル。他方、ターナーは貧しい家庭で育ち、やんちゃな性格であり、コンスタブルは裕福な家庭で育ち、大人しい性格でした。年齢は1歳違い。ぼんやりとした作風のターナーに、隅々まできっちりと描くコンスタブル。全く“好対照のふたり”ですが、唯一、“同じ題材”を描いたものがあります。それが、なんと世界遺産「ストーンヘンジ」なのです。

それでは、このストーンヘンジを描いた、彼らの作品を観てみましょう。



ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー
「ストーンヘンジ、ウィルトシャー」
(1827~28年/ソールズベリー博物館蔵)



ジョン・コンスタブル
「ストーンヘンジ」
(1835年/ヴィクトリア&アルバート博物館蔵)

ふたりとも油絵ではなく水彩画で描いています。二作品を比較すると、着目すべき点があります。それは「空の表現方法」です。写真のない時代の画家にとって、「動くもの」をどう描写するかが、大きな課題でした。どちらも生涯にわたり空の描き方の研究を重ね、この作品の場合は、主役となる「ストーンヘンジ」と空の表現をいかに効果的に組み合わせて仕上げるかに、重きを置いています。

まずターナーの作品は、画面右前方から光がストーンに当たっています。右下の濃い青色によって、雨が去った後のパツと明るくなる様子が描かれています。左上部から稲妻のような一本の閃光も描かれています。暗から明へ、これから何かが明るくなっていくことを示唆させる作品、として仕上げられています。

次に、コンスタブルの作品は、虹らしきものがふたつ描かれています。画面左前方から光がストーンに当たっています。上部の暗色の空から、雨が去った後の虹を描いたものだと分かります。こちらもターナー同様に、これから明るくなっていくものを暗示させる作品となっています。

無数の羊を散りばめてドラマチックに演出したターナーと、まとまった構図と色調で安定感のある作品にしたコンスタブル。彼らの特徴がよく表れていると思います。単にストーンヘンジを描くのではなく、「空の表現」を巧みに使い、何かがこれから起こるようなイメージを期待させてくれる作品に仕上げられています。ご覧の通りの秀作で、どちらも画家としての力量に差はないと思います。皆さんはどちらの作品がお好みでしょうか。この天才画家らをも魅了した「ストーンヘンジ」は、とても神聖な場所であり、のちに世界遺産に登録されたのも納得します。

ストーンヘンジの周辺は草原が広がり、確かに羊も見かけます。また、ところどころに、サークルを掘ったような跡もあり、神秘的です。イギリスのみならず欧州には、先史時代の巨石群が点在しています。たとえば、フランス北西部のブルターニュ地方にある「カルナック巨石遺跡（暫定リスト）」、アイルランドの『ブルー・ナ・ポーニャ：ポイン渓谷の考古遺跡群／登録基準（i）、（ii）、（vi）』、イギリス北部の『オークニー諸島の新石器時代遺跡／登録基準（i）、（ii）、（iii）、（vi）』などが挙げられます。「カルナックの列石」、オークニー諸島の新石器時代遺跡の「ストーンズ・オブ・ステネス」、「エイヴベリーーの環状列石」などは、形状がとても良く似ています。地理的にも、イギリス、アイルランド、ブルターニュ半島は経度（西経）0～10度の間に位置し、遺跡自体も比較的海に近い立地で、古代人が海を北上または南下して定住したものと、仮定できます。

古代人との繋がりを感じさせてくれるのも、興味深いですね。私が訪れた時は、ソールズベリー駅からバスで向かいましたが、何も無い所に忽然と現れるのだから、驚きです。近づくと、その大きさにも圧倒されます。どうやってこの石を運び出して立てたのでしょうか。どうやって環状列石の上に石を載せたのでしょうか。到底、“人力のみ”では不可能でしょう。解明されていないことも多く、まさにミステリーです。

それにしても、ターナーもコンスタブルも、よくこのような場所を訪れたものだと、感心しました。現在でもロンドンから列車で行くにしても、ソールズベリー駅から約30分間のバス乗車が必要です。当時は鉄道も未発達で、路線バスなどもなかったでしょう。ふたりとも、どうやって行ったのでしょうか。また、不思議なのは、「ストーンヘンジ」という題材が、彼らが得意としていた題材とは異なっていて、この二作品はとても異質な絵なのです。なぜ描いたのでしょうか。何が画家たちを惹きつけたのでしょうか。18世紀当時から、ストーンヘンジは、観光地というより「神秘的な聖地」として、国内では知られていました。お互いにロイヤル・アカデミー内で面識があり、先に現地を訪れたターナーの作品を観て、コンスタブルも描きたくなったのかもしれませんが、ストーンヘンジを目の当たりにした時、写真のない時代ですから、画家として描き留めておかなければ、という想いも湧いたことでしょう。旅好きのターナーは、ストーンヘンジ近郊の世界遺産『バースの市街』へも訪れ、この街をスケッチしています。コンスタブルは故郷のノーフォーク（ロンドンの北東部）の風景作品が多く、そんなに旅をしたとも思えません。それなのに、あんなに不便な場所を描きに行ったのだから、よほどの想いがあったのでしょうか。画家の旅の目的は「絵の題材」探しです。美しい景観を好んだふたりが、あえてこの場所を選んだということは、ストーンヘンジが“インスピレーションを与えてくれる聖地”だったことの証です。

古代の巨石遺跡は、天文学と祭祀の要素を多分に占め、信仰の対象となっていることがあります。ストーンヘンジもそのように考えますが、『ストーンヘンジ、エイヴベリーの巨石遺跡と関連遺跡群』の登録基準は（i）、（ii）、（iii）です。なぜ（vi）がないのでしょうか。古代より神聖な場所であったことは確かですので、私は（vi）を加えてもいいのではと思います。

ストーンヘンジへは、ロンドンから半日のオプションツアーが便利です。往復とも専用バスで、気軽に参加できます。皆さんも、ぜひストーンヘンジを訪れて、いにしえのロマンを感じてみてはいかがでしょうか。

沼田政弘